

信頼度NO.1のがん実用誌!

がんサポート

最新乳がん特集

7

2011 Vol.100
定価 1,200円

乳がんの最新基礎知識

遺伝子を調べて個別化治療を

乳がんホルモン療法の誤解を解く

症状で使い分ける最新薬物療法

術前療法もできる分子標的治療

患者に大きな希望!日本発の新薬

2020年乳がん終焉に向けて始動

鎌田實の「がんばらない」対談

ゲスト **MAIKO**(モデル)

最期の生き方・最期の死に方

赤塚不二夫(漫画家)



大阪プレストクリニックに学ぶ、クリニック活用法

★★★

これからの乳がんは、 クリニックで治療を受ける時代

乳がんの患者さんは大病院志向が強く、大病院は今や患者さんが殺到してパンク寸前の状態だ。しかし、近くにあるクリニックでも、大病院に匹敵する検査や治療を行うところがあれば、どうだろうか。ここで、乳がん患者さんたちに、病院に代わる、新しいクリニックの活用法を提案したい。

監修 ● 芝英一 大阪プレストクリニック院長
取材・文 ● 増山育子

患者さん中心の医療は クリニックのほうが実現しやすい

医師として何を専門にするかを選ぶ際に、医局の上司から「今後、乳腺の時代がくる」と進言され、乳腺外科へ進んだという大阪プレストクリニック院長の芝英一さん。当時の日本女性は、欧米と比べてはるかに乳がんが少なかった。まさに「先見の明」だ。それから30年を経た今、日本人女性の18人に1人が乳がんにかかっている時代になった。

芝さんは、大阪大学医学部付属病院や大阪厚生年金病院で長年乳がん治療に携わってきた。

両施設とも近畿地方有数の大病院。そこを辞してクリニックを開院したのには理由がある。

「患者さん中心の医療を行うにはクリニックのほうがやりやすいからです。たとえば大病院は検査1つにしても予約を入れて、診察に来た1週間後に超音波検査、また別の日にマンモグラフィというように何度も足を運んでもらわないといけません。そういった病院側の都合で患者さんに負担をかけたくなかったのです」

芝さんは2005年に大阪プレストクリニックを開院後、07

年にマンモグラフィと超音波による乳がん検診・婦人科検診を行う「レディースドッグ」を独立させた。08年、クリニックから外来診療部門を分けて「外来センター」とし、クリニックの建物を「治療センター」として、手術・入院治療、外来化学療法などを実施する施設にした。さらに10年9月には奈良市に分院である「大阪プレストクリニック学園前」をオープンさせた。

芝さんが大阪プレストクリニ

最新機器に人の心を入れ、 超早期がん発見に努める

クリニックについて語るときの第一声は「クリニックでも大病院並みの医療水準を保ち、安全で快適な最新の乳がん診断・治療を提供すること」だ。

患者さんが不安な気持ちを抱えながら診断結果を待つその問題を解消するために、初診から



これからはクリニックの時代と話す
芝英一さん



明るく清潔感のある外来センター。商業施設「堂島クロスウォーク」4階に外来センターは位置する

診察・検査のすべてを受けられるシステムにした。
患者さんは予約を入れ、大阪プレストクリニックを訪れると、来院したその日に診察→マンモグラフィ→超音波という順序で、約1時間半後には検査が終了するという仕組みだ。必要ならばマンモトーム生検や細胞診といった、より詳しい検査も行い、5日後には結果が出る。この迅速さは大病院ではできないメリットだ。



待合室となる外来センターのロビーにはドリンクコーナーもあり、たくさんのパンフレットや雑誌類が並べられ、ゆったりとした空間が広がっている

ム生検は、日本ではまだ実施できる施設が少ない検査。乳がんに伴う石灰化病変を検知し、ステージ1よりも早い、超早期乳がんの発見を可能にする。
「この「ステレオガイド下マンモトーム生検」は超早期乳がんを見つげることのできる精度の

芝さんはまた、診断・治療機器の整備にもこだわった。その1つがステレオガイド下マンモトーム生検を可能にしたことだ。ステレオガイド下マンモトーム

高い検査です。当クリニックにはがんが乳腺内にとどまっている段階（非浸潤性乳がん）で見つけて、治療を始めることができます。この微小がんのうちに取り除けば、転移・再発を免れる確率が高く、手術自体も乳房温存術で行うことができます」
この超早期がんの発見は治療実績にもつながっている。
「当院では、手術のうち約7割強が早期がんで乳房温存術です。とくに、超早期の非浸潤性乳がんの段階で見つかるケースが、患者さん全体の約2割を占めています。早期がんはステージ1、大きさは2センチ以下のことをいいますので、超早期がんとすると、大きさはそれよりも小さく、ステージ1といえども、当院に赴任したばかりの医師は、あまりに病巣が小さいのでここを摘出したらいいかかわらないと戸惑うほどです」
ただ、最新の検査機器も駆使できなければ宝の持ち腐れとなる。それを使いこなす医師や放射線技師の力量が問われる。芝さんはそれを「機械に心を入れる必要がある」と表現する。
「当院では放射線技師にも読影

所見の技量をつけてもらうので、石灰化が見えたら拡大撮影や別方向から撮り直すなど、患者さんに了解を得て、技師独自の判断で撮影を追加することもあります」

放射線技師にこういった裁量が認められていると、患者さんは診察時に医師から「違う方向でもう1度撮ってきてください」と言われて再度撮影するという手間を避けられる。医師も検査のために費やす時間が省け、技師にしても、意識を高め、責任と熱意をもって腕を磨いていくのだ。

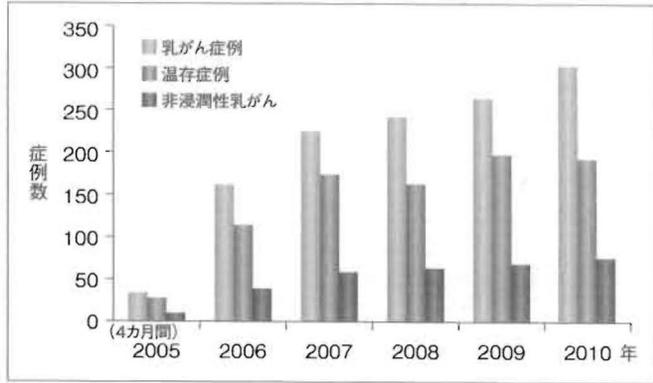
スタッフ全員で情報を共有

大阪プレストクリニックにはプライバシーの保たれた部屋で看護師や薬剤師と患者さんがゆっくり話をするための「面談室」がある。

がんと診断された患者さんは、手術をするならそれまでのスケジュールなど事細かに説明を受け、医師の説明を理解できたか、仕事をしているのか、家族構成、心配ごとや治療中に起こったきそうな悩みなどを相談する。

こうして看護師や薬剤師が得

■大阪プレストクリニック実績(症例内訳)



治療センターにある手術室。大阪プレストクリニックでは、年間300件を超える手術を実施。その数は、大阪で最も多い、大阪府立成人病センターの次ぐりにランクインする



超早期乳がんを見つけることのできる、ステレオガイド下マンモトーム装置。大阪プレストクリニックでは、超早期の非浸潤性乳がんの段階で見つかるケースが、患者さん全体の約2割を占めているという

た患者さんの情報は、週1回行われるカンファレンスで治療方針とともに他のスタッフたちと共有される。「カンファレンスをしない施設では担当医師が治療方針などすべてを決めることになるので、ホルモン療法に抗がん剤を上乗せする必要がないと判断すれば、その患者さんに本来なら必要な抗がん剤治療が行われないケースもあります。そういう意味でもうちでは必ずカンファレンスを行い、その患者さんにどのよ

うな治療をし、どのようなサポートをするかを、全員で話し合った上で決めていきます」
化学療法を最後まで成し遂げるチーム医療の力
 医師、看護師、薬剤師、放射線技師、理学療法士、事務員、さらに患者会といった自助グループも含めて、患者さんを支えるチーム医療の実現を芝さんは目指してきた。

「というのも、乳がん治療は化学療法による副作用や合併症などで、つらくて治療をやめたい」と言う患者さんを勇気づける精神的なサポートが必要だが、こうしたことは医師1人の力だけではできないものではないからだ。たとえば大阪プレストクリニックでは、抗がん剤の副作用対策は薬剤師の仕事だ。薬剤師は薬の重要性や副作用についての説明はもちろん、薬を使い続けられるよう患者さんを励ましていく、精神的な支援という重要な役目も担っている。

「患者さんのニーズにできる限り」と、出てきてから驚いて自己判断でやめてしまい、抗がん剤治療を全うできないからだ。「医師は、患者さんの病気を診るのが主体なので、薬の説明だけになかなか30分もの時間をかけることができません。それからその道のプロである薬剤師に責任をもってやってもらえばいい。薬剤師に時間をかけて説明してもらおうほうが、患者さんからも質問しやすくていいと好評です」
 こうして発揮されるチーム医療の強みが「化学療法の完遂率」という指標に反映されている。完遂率とは、化学療法が最後までできちんと行われているかどうかの目安だ。「つまりサポートがしっかりしていれば、クリニックでもきちんとした抗がん剤治療が可能になるのです」

病診連携でクリニックの限界をカバする

クリニックの限界と、それを補うためにしかるべき施設と連携していることを患者さんに理解してもらおうことも大切だと、芝さんは強調する。

最新乳がん特集

これからの乳がんは、クリニックで治療を受ける時代



治療センターにある化学療法室。部屋には薬剤師が待機し、吐き気などにすぐに対処してくれる



芝さんを中心に、大阪プレストクリニックが独自に作成した小冊子

り応えたいのですが、うちでできることと、できないことがあります。できないことは当院と連携している施設へ依頼することを患者さんにはお伝えしています」

手術なら乳房再建をインプラントで行う場合や乳頭のみのも再建なら同院でできるが、患者さん自身の筋肉を利用して行う再建術は、近隣の関西電力病院の形成外科と連携して行う。

関西電力病院とは、他にも、手術後の放射線治療や病理診断で連携をはかっている。

「クリニックでできないことは、

それができる施設に紹介します。そういったことをあらかじめ患者さんに知ってもらい、理解してもらおうことが大切です」

芝さんは続ける。

「緊密な病診連携、診診連携があれば、クリニックでも大病院と遜色ない治療ができることを情報公開によって患者さんに知っていただくのも、大事なことです」

クリニックで治療する時代に

「これからの乳がんは、クリニックで治療する時代になる」と芝さん。

大きな病院では、患者さんは溢れかえっていて、医師も患者さんも疲れ果ててしまっている。だからこそ、病院とクリニックで役割分担をするべきだと、芝さんは強調する。

「例えば、大病院では診断や手術をして、術後のフォローはクリニックで行うといったように、病診連携が普及していくことが望まれます」

とはいえ、その際に重要になってくるのが、信頼できるクリニックをどう選ぶかということだろう。

芝さんは、クリニックを選ぶ際の基準として、わかりやすいのは「手術件数」を見ることと

アドバイス。

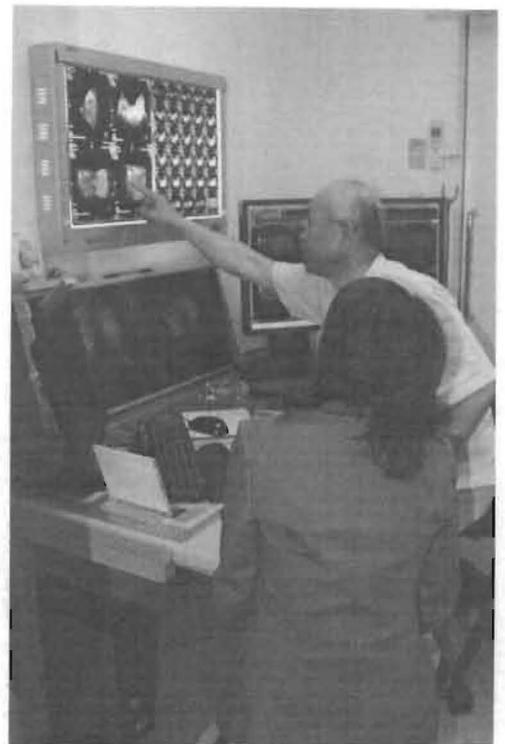
「年間20例以下といった少数のところは避けたほうが賢明でしょう。というのも手術は外科医だけでではなく、麻酔科医や看護師や放射線技師たちも関わるチームワークが必須ですから、ある程度手術件数をこなしていれば、乳がん精通したスタッフがそろっていると考えられます」

また、化学療法の実施数・完遂率も参考になる。

大病院に一極集中となつてい

る現在のがん治療。こうした情報をもとに、患者さんにはぜひ信頼できるクリニックを選び、活用してもらいたい。

⑤



大阪プレストクリニックにおける診察時の様子。患者さんにも信頼できるクリニックをもっと活用してほしいと芝さんは話している